



経口維持加算の算定のポイントについてご説明させていただきます。

解説は、日本音楽療法学会認定音楽療法士として口腔介護に豊富な経験をお持ちで、またケアマネージャーとしてもご活躍の尾形由美子先生（鹿児島県 尾形歯科医院勤務）にお願いしました。

経口維持加算、算定できていますか ～食事現場での観察ポイント～

4月から経口維持加算が新しくなり、以前より算定しやすくなりました。
この観察のポイントについてお伝えしたいと思います。

まずは、利用者本人の口腔機能の状況を確認し、以下のような視点で観察します。

- その口腔機能と食事形態がしっかりあっているか
- 口腔機能を引き出す食事介助ができていいるかどうか
- 姿勢や食器・スプーンなどの食事環境に問題はないか



口腔機能を観察するにあたって、「摂食嚥下」をまずは「摂食」と「嚥下」に分けてみましょう。

具体的には口腔内への摂りこみから咽頭への送り込みと、嚥下反射とに分けて観察します。

前者は口唇の反応や動き、舌の力や可動域といった口腔ケア時に見られる反応なども参考にして考えていきます。スプーンが下口唇に触れたら開口する、上口唇でスプーンからすくい取って捕食ができる、口角がしっかり動きがある咀嚼ができる、歯や義歯の状態、など日常の様子や専門的な見地から多職種が話し合います。

後者の嚥下反射については、そのスピードや力、誤嚥の有無等触診や頸部聴診を行うと判り易いでしょう。これらを観察したうえで、その口腔機能に現在の食形態があっているか、どんな食形態が一番食べやすいのかを検討しましょう。口腔内の食物残渣の状態や嚥下反射が出るまでのスピードや、食事にかかる時間なども一つの指標になるでしょう。よくわからないときには、数種の食形態を準備して摂食の様子を観察してみるとよいでしょう。例えば、歯ですり切るようにして食物を口腔内に置いてきたり、スプーンで落とす～

だいたい食形態が決まったら、それをどのように食事介助することでその方の残存している口腔機能を上手に引き出し安全に食べていただくかを考えてみましょう。食事介助は口腔機能が低下している部分を補う行為だと考え、ただ何となくではなく、舌や口唇の動きを意識して介助を行うことがとても大切です。なぜなら、歯ですり切るようにして食物を口腔内に置いてきたり、スプーンで落とすように置いたりする食事介助は、上口唇を使わせない食べさせ方になるからです。すると、本来上口唇に食物が触れることで嚥下反射の準備が整うというセンサーの役割を使わないことになるわけです。その結果、嚥下反射が出にくく誤嚥のリスクが高くなります。実際、上口唇でスプーンからしっかりすくい取るように食べさせたり飲ませたりすることで誤嚥がぐっと減るのをよく目にします。もちろん、正しい姿勢や器具などの環境整備も重要です。

その他、認知症の場合には、口腔機能の使い方を忘れていくことが多く、いつまでも長く食べ続けるためには反射を使った摂食がどうしても必要です。反射を維持していくためにも、食事中のみならず、口腔ケアや遊びの中で、口腔や顔面に多くの刺激を与え続けることがとても大切なこととなります。

総合的にその方の生活を見ていくことができるというのが、多職種がかかわる良さの一つです。

